

Kiyoji Otsuji:  
Seeing Beyond Things  
Towards a New Perspective  
on Photography Archives



生誕一〇〇年  
大辻清司 眼差しその先  
フォトアーカイブの新たな視座



会期— 2023年9月4日①▶10月1日②  
 休館日— 水曜日 入館料— 無料  
 開館時間— 11:00-19:00 (土・日曜日、祝日は10:00-17:00)  
 主催— 武蔵野美術大学 美術館・図書館  
 会場— 美術館展示室3・4・5  
 監修— 大日方欣一 (九州産業大学芸術学部教授、九州産業大学美術館館長)  
 協力— 株式会社DNP メディア・アート、九州産業大学  
 助成— 公益財団法人 花王 芸術・科学財団  
 公益財団法人 三菱 UFJ 信託地域文化財団

**MUUM&L**

Musashino Art University Museum & Library  
 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 tel.042-342-6003  
<https://mauml.musabi.ac.jp/museum/>



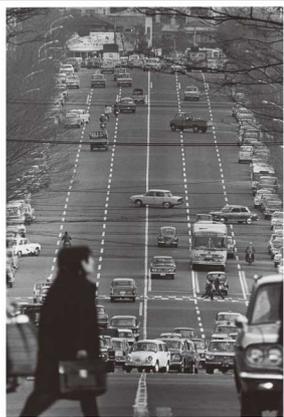
# アーカイブ研究によって見えてきた、写真家大辻清司が「写し出したこと／作り出したこと」

◆写真家大辻清司は、1940年代より実験精神溢れる写真作品を制作するとともに、美術・音楽・演劇・ダンス・建築にわたる同時代の諸動向に立ち会い、独自の視点からドキュメントを撮り続けました。また『アサヒカメラ』などの誌上で優れたエッセイを残したほか、多くの後進を育てた教育者としても知られます。諸分野で確かな功績を残しながら、その一方で大辻の仕事は多面的であるがゆえに一言では捉え難く、生誕100年を迎えた現在でもなお、その表現の本質を探る可能性を秘めた存在だといえます。

◆当館では、大辻が残したプリント、撮影フィルム、作品掲載誌や蔵書などから「大辻清司フォトアーカイブ」を構成し、15年にわたって研究を重ねてきました。作品そのものと周辺資料の包括的な検証によって制作過程を追うことは、写真家が何を見つめ、どのように対象に迫ったのか、その関心の在りどころと思考を明らかにする重要な足がかりとなります。とりわけ撮影フィルム

に記録されたコマの連続からは、作品の背景にある試行の跡や、被写体との間に醸されていた機微までもをうかがうことができます。

◆本展では、これまでのアーカイブ資料検証によって得られた視座を軸として、「原点」「シアター」「シークエンス」「他者たち」からなる四つの章によって、大辻清司とはいかなる表現者だったのか、その真髄へと迫ります。オリジナルプリントと撮影フィルム上の未発表作品、印刷メディアでの仕事や執筆テキスト——多彩な広がりを見せた写真家の実践の数々を、互いに関連しあうものとして捉える構成は、本展を特徴づけるものといえるでしょう。また、フィルムに残された多くの知られざる作品に光をあて展観することは、アーカイブ活用の大きな試みとなります。本企画は、新たな大辻像の輪郭を辿るとともに、アート・アーカイブのひとつの在り方を示し、その先に何を見出すことができるのかを探る行程の一步でもあります。

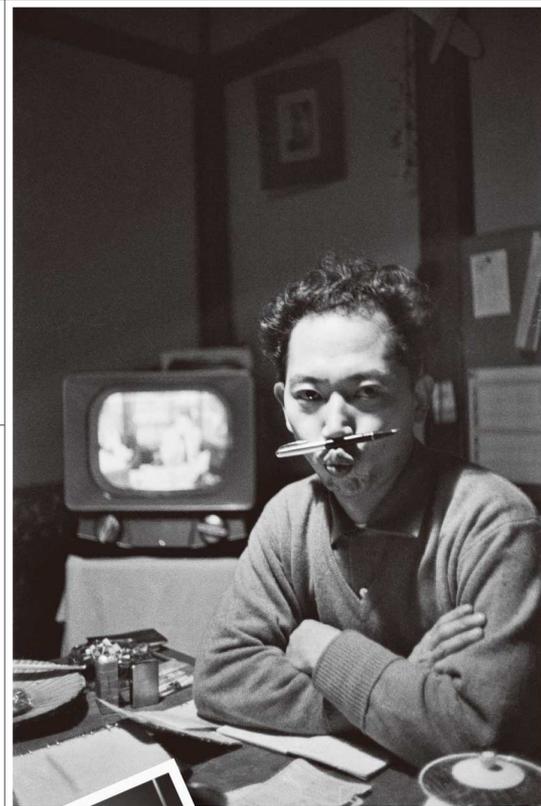


## 「大辻清司フォトアーカイブ」とは

当館では、大辻清司の自宅アトリエに残されていた写真プリント、撮影フィルム、作品掲載誌や蔵書、実際に使用していた撮影機材や暗室道具など、大辻の創作活動をほぼ網羅する資料群からなる「大辻清司フォトアーカイブ」を形成し、2008年の寄贈受入より継続して検証・研究・活用を行っています。展覧会「大辻清司フォトアーカイブ：写真家と同時代芸術の軌跡1940-1980」(2012)の開催や、1,613点のプリントを収録した目録『大辻清司：武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵作品目録』(2016)の発行を通じ、その成果の公開にも努めてきました。2017年からは『大辻清司アーカイブ フィルムコレクション』と題し、撮影フィルムの内容を検証する目録シリーズの刊行を開始し、現在までに7巻の発行にいたります。

## 大辻清司(おおつじ・きよし)

写真家。1923年東京生まれ。1940年代末にシュルレアリスムの傾向を色濃く窺わせる写真作品《いたまじき物体》を発表し創作活動を開始。1950年代にはインターメディアの前衛芸術グループ「実験工房」に参加。さまざまな芸術ジャンルのアーティストと交流し、20世紀末まで約半世紀にわたり制作と思索の営みを続けた。同時代芸術の貴重かつ膨大なドキュメントを撮影したことで知られる。長年携わった写真教育の場でも重要な業績を残し、高梨豊、潮田登久子、牛腸茂雄、畠山直哉をはじめ多くの優れた才能を見出し、世代を超えて感化を及ぼしあった。また、写真というメディアの特性と新しい表現への可能性を考察した優れたエッセイを数多く執筆。著書に『写真ノート』(美術出版社、1989)。代表作に《陳列窓》(1956)、《無言歌》(1956)、《東京むかし》(1967)、《日が暮れる》(1975)ほか。2001年に逝去。享年78。



表面(右上から反時計回り)  
 《新宿・夜》1952年、1970年代前半の大辻清司  
 《クロストーク/インターメディア》1969年\*  
 《円型劇場形式による創作劇の夕》  
 『月に憑かれたピエロ』1955年\*  
 《顔の中の旅》1960年\*、《無言歌》1956年\*  
 《道》1969年\*、《昇降》1974年\*  
 《銀紙に包んで少し残っているきざみタバコ》1974年  
 裏面  
 右下 1970年代前半の大辻清司  
 右中 《日が暮れる(夜遅くまで勉強している人)》1975年  
 左上 《超望遠の表現》1967年  
 左下 実験映画「上原二郎」1973年  
 いずれも当館蔵  
 \*フィルム原稿からの出力



## 【関連イベント】

### ギャラリートーク

日時 | 9月4日(日) 17:00-17:45

出演 | 大日方欣一(本展監修者)

会場 | 美術館展示室3・4・5(本展会場)

### トーク+再現コンサート

「クロストーク/インターメディア」\*(仮)

日時 | 9月23日(土) トーク | 13:00-14:00 コンサート | 14:30-15:30

アコースティック演奏 | 檜垣智也(作曲家、東海大学准教授)

解説 | 川崎弘二(電子音楽研究)

会場 | 美術館ホール

\*1969年、国立代々木競技場で開催されたアートとテクノロジーの結合を目指した音響映像イベント。

### 講演会「大辻清司フォトアーカイブ報告—これまでとこれから」

日時 | 10月1日(日) 14:00-15:30

出演 | 大日方欣一

会場 | 美術館ホール

◆内容など詳細が決まり次第、当館Webサイトでもお知らせいたします。

◆当館「大辻清司フォトアーカイブ」は、大辻清司の生誕100年を記念する展覧会に協力しています。

「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容 瀧口修造 阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

新潟市美術館 2023年7月29日(土) ▶ 9月24日(日)

渋谷区立松濤美術館 2023年12月2日(土) ▶ 2024年2月4日(日)

◆会期中、一部展示替えあり。

### MOMATコレクション 小特集「生誕100年 大辻清司」

東京国立近代美術館 2023年5月23日(土) ▶ 7月17日(日) / 7月19日(日) ▶ 9月10日(日)

### 【同時開催展覧会】

大浦一志——雲仙普賢岳／記憶の地層



MAUM&L

Musashino Art University Museum & Library

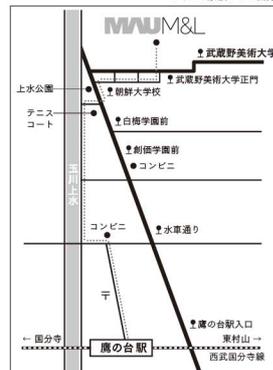
武蔵野美術大学 美術館・図書館

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

tel.042-342-6003

https://mauml.musabi.ac.jp/museum/

Twitter, Instagram: @mau\_m\_l



●西武国分寺線「鷹の台」駅下車、徒歩18分  
 ●JR中央線「国分寺」駅北口4番停留所より西武バス「武蔵野美術大学」行または「小平営業所」行に乗り、「武蔵野美術大学正門」停留所下車(バス所要時間:約25分)  
 ●JR中央線「立川」駅北口5番停留所より立川バス「武蔵野美術大学」行に乗り、「武蔵野美術大学」停留所下車(バス所要時間:約25分)  
 ※お車までのご来場はお控えください